The Japan Lung Cancer Society



**1 症例**

名古屋第一赤十字病院呼吸器外科
藤田興一，小林　零

症例は60歳男性．2001年7月左上葉腺癌にて，左上葉切除＋ND2aを行い，術後UFTの内服を行う．その後，外来通院中の2005年6月胸部CT上，$S^6$を中心に径0.5〜1 cmの空洞を4個認め，PET検査でも同部に陽性となったため，同年10月手術施行．$S^6$の部分切除にて第2癌（腺癌）と診断．左肺残肺全摘を行う．考察を加え報告したい．

**15. ゲフィチニブ使用後に肺葉切除を施行した1例**

愛知県がんセンター中央病院胸部外科
坂倉範昭，奥田勝裕，岡阪敏樹
森　正一，波戸岡俊三，篠田雅幸
光冨徹哉
同　遺伝子病理診断部　谷田部恭
愛知医科大学呼吸器内科　森下宗彦

71歳女性．2003年11月，左上葉腫瘍φ36 mmと対側縦隔リンパ節腫脹を認め，左上葉肺癌cT2N3M0 stage IIIBと診断．化学放射線療法を希望されなかったため2004年1月よりゲフィチニブ250 mg/dayの投与を試みたところ，縦隔リンパ節は著明に縮小，主腫瘍はφ32 mm程度まで縮小し2005年5月までにPETで原発巣に集積を認めるのみとなりycT2N0M0 stage IBと判定．7月，左肺上葉切除・リンパ節郭清を施行した．肺門縦隔リンパ節は比較的容易に剥離が可能でysT2N0M0 stage IBとした．病理は中分化腺癌，縦隔リンパ節にはviable cellを多く認めypT2N2M0 stage IIIAであった．EGFR遺伝子検索を行ったところ，ゲフィチニブ感受性に関与するL858Rおよび獲得抵抗性に関与するとされるT790Mの変異を認めた．ゲフィチニブによるinduction therapyの可能性をさぐるうえで貴重な症例と考え報告する．

**16. EGFR遺伝子変異を認めたがゲフィチニブが著効しなかった肺腺癌の1例**

聖隷三方原病院呼吸器センター外科
森山　悟，山田　健，棚橋雅幸
彦坂　雄，木村泰生，丹羽　宏
同　病理　小川　博
浜松医科大学第1病理
奥寺康司，椙村春彦

症例は71歳，男性，喫煙者．健診異常影にて当院受診．右肺癌にて中下葉切除術施行．低分化腺癌，pT2N1M0 stage IIBであった．術後6か月目に肝転移を認めラジオ波焼灼治療を施行．術後8か月目に左第5肋骨転移を認め，PTX，CBDCAによる化学療法を施行したものの奏功せず，術後10か月目よりゲフィチニブ内服開始．肋骨転移に対し放射線治療を，多発脳転移に対しACCU Knifeを施行．ゲフィチニブは著効することなく，投与開始14ヵ月後全身転移にて死亡した．本例ではEGFR遺伝子Exon 19に変異を認めたものの，EGFR下流のPIK3CA遺伝子にも変異を認め，ゲフィチニブ耐性の要因の一つと思われた．

**17. EGFR遺伝子変異検索結果に基づきゲフィチニブ投与を行い著効がみられたPS不良非小細胞肺癌の1例**

愛知県がんセンター中央病院呼吸器内科　樋田豊明，朴　智栄，都築則正
清水淳市，堀尾芳嗣，吉田公秀
同　遺伝子病理診断　谷田部恭

症例は63歳，女性．糖尿病にて近医通院中に肺陰影出現し肺炎の治療施行．改善みられず2004年11月15日当院紹介．胸水より腺癌認め，肺癌（T4N3M1）と診断．骨，脳，肺に広汎に転移認めPS不良であったが，胸水癌細胞のEGFR遺伝子変異検索でExon 19の遺伝子欠損認めたためゲフィチニブ投与行った．その結果著効が認められ，腫瘍の縮小と全身状態の改善が認められた．化学療法の適応の難しいPS不良患者に対して，EGFR遺伝子変異検索結果に基づいてゲフィチニブ投与を行うことは臨床的に有用であると考えられた．

**18. 3-rd line chemotherapyが著効した高齢者肺癌の1例**

公立陶生病院呼吸器・アレルギー内科
近藤康博，谷口博之，木村智樹
西山　理，加藤景介

症例は77歳，男性．平成15年6月，咳嗽，胸部異常影にて紹介受診．精査の結果，扁平上皮癌（cT1N1M1，stage IV，PS 0），合併症COPD（GOLD，stage III）と診断した．1-st line chemotherapyとしてvinorelbine（25 mg/mm²/週×2）2コース施行するもPDにて終了．2-nd line chemotherapyとしてgemcitabine（1000 mg/m²/週×2）2コース施行しSDにて，以後total 20コース施行可能であったが，最終的にPDとなる．平成17年6月より，3-rd line chemotherapyとしてpaclitaxel療法（70 mg/m²/週×6）＋COX2（メロキシカム）併用療法を施行．2コース終了時にSDとなり，3コース終了時には陰影は著明に縮小した．高齢者肺癌において化学療法により恩恵が得られた症例であり報告する．

**19. 転移性脳腫瘍に対してTS-1が著効した1例**

三重大学呼吸器内科
高木健裕，藤本　源，丸山貴也
西井洋一，中原博紀，小林裕康
小林　哲，E.C. Gabazza，田口　修

76歳，男性．2003年10月，右上葉原発の肺腺癌に対し化学療法を施行．一旦は改善していたが，2005年6月，胸部CTにて右上葉腫瘍の増大みられ，加療目的にて当科紹介．頭部MRIにて大脳鎌右側に接する2 cm大の腫瘤を認めた．TS-1内服による全身化学療法を行ったところ，著明な腫瘍の縮小効果を認め，大脳鎌右側の腫瘤も消失した．非小細胞肺癌の転移性脳腫瘍にTS-1が著効を示した例はまれであると考えられたため，報告する．

**20. 切除不能III期非小細胞肺癌に対するシスプラチン/ビノレルビン＋胸部放射線同時照射併用療法の検討**

静岡県立静岡がんセンター呼吸器内科
中村有希子，高橋利明，上田眞也
板谷　徹，小暮啓人，海老沢雅子
浅井　暁，山本信之

切除不能III期非小細胞肺癌の標準的治療は胸部放射線照射と化学療法の同時併用である．化学療法レジメンとしてCDDP/VNRが一般臨床で認容性があるかを検討するため，毒性，効果に関して当院でCDDP/VNR＋胸部放射線同時併用療法を行った9症例を検討した．全例治療途中だが，Grade 3以上の非血液毒性を認めず，奏効例


NII-Electronic Library Service